

早稲田大学審査学位論文  
博士（人間科学）  
概要書

開発支援の実践をめぐる文化人類学的研究  
—専門知のリハビリテーションへむけて—

An Anthropology of Realities of Development:  
Towards a “Rehabilitation” of Professional Knowledge

2020年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

内藤 順子

NAITO, Junko

## 本論文の目的

本論文はチリにおける「貧困者」・「障害児」・「開発・支援者（専門家）」の三者それぞれと 20 年にわたる関係が続けてきた筆者による、支援をめぐる民族誌的研究である。はじめて開発の現場に接し、ときに強者の立場でかかわることにより見えてきたのは、支援という営みが不思議なまでに空転し、暴力的にもみえることであった。そこで、開発支援という営みがよりよくまわり、いわゆる社会的弱者とそうでない人びとがうまく共生するにはどのような道がありうるのか、そのためのわずかばかりの提案と提案にいたるプロセスの詳述である。

まず、主題となる貧困について人類学とのかかわりから概観したのちに、チリにおける貧困問題の概要を述べる（序章）。つぎに、「社会的弱者」と前提されている「貧困者」の生活世界の民族誌と、「社会的弱者とされる人びとと強者とのかかわりの民族誌」とおして、問題含みにとらえられる支援のありかたを明らかにする（第 1 章、第 2 章）。そこではあわせて、貧困研究に対して「貧困空間」というひとつのみかたを提案し、「被支援者＝小さき人びと」の文脈から世界をまなざすことを試みる。それは本論文をとおして扱う「社会的弱者」と支援者たるわれわれの文脈のちがいが、意外にも大きな影響をもたらしていること、文脈移動にヒントがあるのではないかということを示唆する。そして、前章までと同じ貧困地区に住まう障害児を対象としたプロジェクトを研究のフィールドとして、筆者自身が支援の実践に加わった経験から、「開発支援の実践のなかで異文化間の共約性を「専門家」として模索する、2 段構え（鳥の目と獣の目）の民族誌」（第 3 章、第 4 章、第 5 章）を描く。それらをふまえ、専門知のリハビリテーションの提案（第 6 章）について論じている。

## 貧困と障害という「社会的弱者」であることが前提の対象と向き合うことについて

具体的にいうなら、貧困も障害も、ある種の欠乏状態＝否定的イメージで認識している外部の人間が、持てる側からの発想で関与し介入していることが、逆にいくつもの壁を形成している現実がある。「貧困」や「障害」といったときに、内部にいる人間（当事者）がイメージするものと、外部にいる人間がイメージするものは明らかに異なる。そして皮肉にも外部における言説が優勢ゆえに、内部者は外部言説に閉じ込められることで、現実の生活を社会的に失ってしまうのである。いわば「貧困」や「障害」は外部からの名づけであり、従来の文化人類学においてはこの名づけの事実を前提としていることに無頓着に弱者に寄り添いつつ「社会的弱者研究」を成してきた。「貧困」や「障害」という概念とその前提を改めて問うことは、人類学の根幹と現在の状況を自省をもって見直し、可能性を模索するものでもある。そして人類学のみならず学問世界あるいはあらゆる専門知識集団全体の自省を促すことを試みる。すなわち、諸概念に感覚と行動を支配されている「われわれ」を元の状態に戻す、つまりリハビリテーションすることである。筆者の調査地であるチリのサンチャゴ市における入り組んだ「社会的弱者」の現実について、人類学的理論およびフィールドワークの手法に加えて、隣接諸分野あるいは「手元の実感」（学術的には削除されてきた感情や現場の泥沼化した人間関係など）を用いて解きほぐしている。

## 貧困の人類学

貧困を研究することの意味とは、貧困の再生産をできるだけ減少させる手段を探すことである。本論文では P. ブルデュのハビトゥスの概念を援用し、「貧困のハビトゥス」という、貧困者の行為と実践の側面を分析可能にする手立てを提案する。それによって貧困者の精神的側面についてより深く分析することを試みる。実践面と精神面という明確な二分法は避けつつも、両者に目配りした考察によってしか貧

困の再生産プロセスを止めることはおろか、とらえることもできない。貧困の内部にいる人びとは、現実世界をどのようにとらえているのか。いっぽうで外部の人間は、貧困を本質化していないかどうか。貧困の内部にいる人間が、貧困から自由になるとはどういうことなのか、どのように現実には立ちむかい、いかなる貧困克服の理想像を持ちうるのか、貧困克服のための道筋を考えるために、貧困者の視点からの研究を継続する必要性を述べている。サンチャゴ市の貧困地区におけるフィールドワークを通して、貧困の諸相について(貧困内部からの貧困像)と、貧困への諸相(貧困外部からの貧困像)を調査・分析する。疑問をもたれることなく常識として通用している「貧困＝悪」という大前提が正しいのかどうか、悪であるとすればいかに誰にとっての悪なのかを、貧困者の現場から模索する。それは「貧困をひらく」ことであり、自明化した概念にとらわれることなく、現実から貧困現象の実態を捉える作業である。

#### 障害とリハビリテーションをとりまく人類学

隣接分野の知見も援用すると上述した通り、対象にふれ、向き合うことから始める臨床心理学的思考と実践は、人類学が対象と向き合うよりも具体から立ち上げられており、前提となるのはパラダイムではなく現場である。こうした学の知見を併せることで本稿では、①「社会的弱者」の現実を解剖することで概念の自明化の実態を明らかにし、②「概念の自明化」と「専門知を閉じ込めておくこと」に慣れてしまった「われわれ」をリハビリテーションし、③「社会的弱者」とそれをとりまく外部の人間の共生の道筋を実践的に探っている。

#### 強者あるいは専門家の論理構造について

貧困を悪とする人びとの論理、すなわち貧困を解消しようと躍起になる貧困外部者や開発者はいかなる論理構想で生き、なぜそうした論理がつくられるのか、その生成過程を見るために、貧困環境下において実施され、筆者が携わってきた障害児リハビリテーションの地域展開の現場調査から考える。医療技術集団と貧困を、現代世界の「先端」と「停滞」と言い換えることができるなら、その両極端に位置する世界の交流を、障害児をとりまくリハビリテーション計画から考察している。これはすなわち「専門知(強者の論理の背景)の生成過程を見、ひらき、つなぐ」作業である。

そうして最後に、ひらかれた貧困概念と、実践に即利用できるようなひらかれた専門知をもちいて、現実の「社会的弱者」の生活環境と空間をあらためてとらえていく作業を行い、可能な共生のありかた＝専門知のリハビリテーションを提示している。

#### エスノグラフィーの手法の可能性

これまで半世紀以上にわたって構造的に変わらなかった支援における急勾配な関係性(支援者の圧倒的優位性とそれを疑いにくい構造、それに基づく関係性)についての批判と自省の研究は多くある。だが、強すぎる批判力は何も生まず、自省しすぎることは偏りを生じさせる。本研究の<開発現場「の」人類学>と<開発現場「で」人類学>の二段構えで地域リハビリテーション(CBR)という実践をとらえる試みは、多少なりともこの分野の「ありがちな議論」を新しくするものと自負する。“鳥の目”すなわちプロジェクトを俯瞰しつつファシリテートする(導く)立場からの民族誌を描き、いっぽう後者については二次元すなわち“獣の目”で巻き込まれ、喜怒哀楽をつつみ隠さず描くことで、先への見通しを手放すことなく、しかしながらもっと手前の、当たり前すぎて疑えない構造ができていたことを発見し、自覚的になれるであろうことを導き出した。